

# 史遊会通信

NO. 191  
平成22年  
10月15日  
発行

事務局  
03-3712  
0651  
下山田方

## 九月講演要旨

### 奴国から邪麻堆へ

中山喬央

日本列島と中国大陸との文書に記された交渉は、『後漢書』倭伝の西暦五七年「倭奴国が後漢に奉貢朝賀し、光武帝が印綬を賜う」に始まり、『魏志』倭人伝では西暦二二八年（二二九年の誤りか）「六月、倭の女王卑弥呼が大夫難升米らを魏に遣わす。十二月、魏の明帝が、親魏倭王卑弥呼に制詔する」とあります。

この事で一番問題になっていたことは、奴国は博多湾沿岸の須玖岡本遺跡であったということでは皆の意見が一致しています。が、倭の女王卑弥呼がいたであろう邪馬台国の所在地がどこにあったのかということと、若しその所在地が九州以外の地である

場合には、どうしてそのようなことが起こったのであろうかという議論が延々として続けられてきました。

今回の講演では従来とは全く違った観点からそれを論じ、邪馬台国は大和にあったのだと断定し、その理由として『住吉大社神代記』と、日本列島全体の考古学的発掘成果、及び該期の日本列島に対する中国大陸、朝鮮半島等よりの相次ぐ来寇を考察いたしました。

○鮮卑・檀石槐の侵攻とそれに対応する出土遺物の動き

西暦一八二年と推定される鮮卑及び朝鮮

## 例会のお知らせ

### ◎ 10月例会

日時 平成22年10月27日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 柴田弘武氏

テーマ 北総の内黒土器

自由執筆は新井 宏・島津隆子

中山喬央の諸氏。

締切りは10月31日。

### ◎ 11月例会

日時 平成22年11月24日(水)

午後6時～8時

会場 目黒区民センター 7階

社会教育館 第2研修室

講演 新井宏氏

テーマ 原稿作成とインターネット

自由執筆は会員及び友の会員による

「今年感動した三冊の本」

締切りは11月30日。

半島諸国連合軍の博多湾沿岸地域への侵攻は、不意をつかれたこともあって壊滅的な打撃を奴国をはじめとする博多湾沿岸地域諸国に与えました。

其の為、それまで同地域でのみ行われていた鏡の一括大量埋葬を含む、墳墓よりの豪華な出土品は、全く影をひそめ、やがて古墳時代に入り、畿内の桜井茶臼山古墳、天神山古墳（崇神天皇陵陪塚）、新山古墳等で見られるようになります。

又列島を代表する装飾品である翡翠製品も、弥生時代中期には北九州に出土が集中していたものが、弥生時代後期には吉備に古墳時代に入りますと、畿内にウエイトが移動します。

更に土器の動きもこれを裏付けます。土器はある時は東から西に、またある時は西から東に動きますが弥生時代終末期に入りますと、畿内で作られた庄内甕が、北陸、中四国、九州にひろがり、一方伊勢で作られ濃尾平野で発達したS字甕は東海、相模から関東平野北部までひろがります。

しかし古墳時代に入りますと畿内で発生した布留甕を含む布留式土器が、西は九州から東は関東まで全域に広がるのです。

#### ○住吉大社神代記

次に海上交通安全の神として最も著名で全国に二千一二九の住吉神社を持つ住吉大社が本宮を神功皇后摂政の十一年（二二一）筑前博多から、摂津に移すのです。また同大社が所有している『住吉大社神代記』に記載されている主要な九つの宮の中に新羅国と大唐国の名前が挙げられています。

新羅国については、神功皇后の三韓征伐、すなわち檀石槐の来寇を支援した半島諸国への報復と制海権の回復を狙ったものであり、大唐国については、漢時代のような交易の実利を求める航路の安全祈願の目的であったと考えます。

#### ○呉・孫権の来寇

西暦二二〇年に呉の孫権が来寇を目論んだ夷洲と亶洲は、夷洲は台湾で良いと思いますが亶洲の種子島説は間違いでこれは博多湾沿岸諸国を指向したものと考えます。

その理由は①洲という字は大きな島にしか使われておらず沖縄本島も「琉求」と呼ばれており、種子島は「多尼」と呼ばれていました。②この後、孫権は鮮卑の後を次いで遼東地方の覇者となった公孫淵と、海路交流するのですが、事前に檀石槐の博多

湾岸侵攻成功のニュースは知っていた筈であり、又それにつき勢力範囲にいる会稽の海人から裏付けを取り彼等を水先案内人にするのができたということでした。

しかし西暦二二〇年当時は、倭の制海権が復活しておりましたので来寇に失敗し、二将がその責めを負わされたのだと考えます。

このように短期間の制海権復活は、大和を中心とする畿内勢力の参入がなければ到底実現できるものではありませんでした。

#### ①朝鮮半島関係で訂正すべきもの（二つ）

①蘇塗祭祀の銅鐸祭祀根源説  
『漢書』韓伝―「蘇塗は悪事に利用されている。」従って列島の銅鐸祭祀とは関係がありません。

②『漢書』弁辰の条―「この国は鉄を産し、韓・濊・倭はそれぞれここから鉄を手に入れている。」この倭は日本列島の倭ではありません。この文章の前に、倭と韓とは帯方郡の支配を受けるようになったという記事があり、また後には弁辰のうち瀆盧国は倭と境界を接している、とあるからです。このように、この記事の倭は当時半島内に存在した倭を指している事は明白です。

自由執筆

## 民族対立から部族対立の時代へ

隆 恵

最近、仏国のロマ人の不法移民排斥の報道を耳にして、「ロマ人もしくはロマノ人」の概念を調べてみた。それによると、元々は十世紀頃インド北部にいた民族が、理由は不明ながら西に西に移動して主に中東欧地域に土着した遊牧民、俗にジプシーの呼称で表現されるそうだ。ロマ人は、先祖発祥の地のヒンドゥー教を信仰する人が多く、欧州古来の土着民族と馴染まず、約千年に亘って虐げられ、下層階級を形成していた。民族虐待では、二十世紀のナチスと旧ソ連によるユダヤ人虐殺が有名だが、このロマ人の虐待も広い地域で継続的に行われ、ユダヤ人の陰に隠れて報道されなかっただけとあった。このロマ人問題の表面化の原因は、二十世紀末の共産主義による専制国家の崩壊、一方EUの拡大で物流だけでなく人間の移動が簡便になり、西欧諸国に流入してゆく事となる。仏独等の先進西欧諸国は、過去の好景気の時に低賃金労働力確保の目的で積極的に受け入れるが、ここ数年

の長期景気低迷で、ロマ人や仏国のアルジエリア人等のイスラム教の風俗への拒否反応が加わり、独国も同じイスラム教徒のトルコ人問題で同じ悩みを抱える。

こうした少数民族の排斥の背景には、常に多数民族の失業問題と少数民族のスラム化、これに加えて異宗教の文化の違いが問題を顕在化させている。移民受け入れの本家の米国は、黒人問題に加えて不法移民ヒスパニック問題で大きな政治問題となっている。およそ民族間の相克は人間の永遠の課題だが、二十一世紀になって世界的な民主主義の浸透、インターネットの普及により政府の恣意的情報統制の至難さ、更に世界同時不況の長期化による貧困問題が政治・社会問題となり、抱える少数民族が邪魔になった、これに加えて理屈では解決できないイスラム教と他宗教との対立が加わり、問題を複雑化させている。

こうした古典的な民族・宗教対立に加えて、今世紀は「民族」内の「部族」間の軋轢と確執が顕在化するであろう。その論拠は、人間の本質には己対他人という考えがあるからである。人間は所詮弱肉強食の動物である。それを補正する手段として「博愛・協調・謙譲」等の他人との共同生活の

規範を考え出して、それをお互いに守る事で共存をしようとして来た。人間の集団の対立の単位は、外見（肌の色等）の違いや、信仰宗教による対立、国家間対立、次に民族対立、次に部族対立、次に地域間対立、最後に個人間の対立となる。同じ民族なのに憎しみ合うのが、永年のアフリカ諸国の部族対立や、旧ユーゴの核分裂であり、イラクのスニ派とシーア派の憎しみ合いもこの類ではなからうか。そもそも、こうした憎しみ合いの原因は、何時の世も構造的な貧富の格差か一方的な富の搾取という経済問題が必ず背景にある。貧富の格差には少なからず人間の努力の差が影響するので永遠になくならないし、従って人間の集団間の争いは永遠に続くであろう。

民主国家が主流の今世紀は、過去の専制国家による抑圧や情報統制が至難のため、人間の集団の対立は際限なく生じ、最後は個人間の対立の先鋭化を齎す事となる。世界最大の多民族国家の中国も、一党独裁の専制主義の抑圧にも限界が来て、益々民族対立が先鋭化し、更には絶対多数の漢民族内においても部族対立や地域対立が表面化するであろう。ロシアやインドをはじめとして世界各国でこうした対立が表面化しよう。

自由執筆

## ハーブ開眼

高橋 由貴彦

かれこれ四十数年もまえになろうか。初めてヨーロッパを旅行した時、恥ずかしながらハーブというものを初めて知った。

香辛料の小瓶詰めは青山の高級スーパーの「ユアーズ」などにはおいてあり、赤胡椒や、ローズマリー、クミン、などは知っていたつもりではいたし、高樹町のドイツ人経営の「ハイデルベルク」や、狸穴のイタリアンレストラン「キャンティ」には時々たま通い、小生意気にも食通を任じていた我が輩だったが、あの時のハーブを知ったショックはさすがに隠せなかった。

南フランスの花の楽園グラスをタクシードとおり、絶景の花香水の実態をみて度肝をぬかされながら、ニースの郊外の山頂きのかの有名な村サンポール・ド・ヴァンヌを目指した。

じつはこのサンポールははっきりいってあまり日本人には知らせたくないすばらしい村で、日曜画家でも知られる英国宰

相チャーチルがこっそり通った事でも有名で、富豪の別荘がひしめいている。

村の中央の小さな広場には、かつて馬の飲み水に使用されたという噴水のある丸い石造りのモニュメント「グランドフォンテーヌ」があり、ヨーロッパ中世そのままの城壁集落が目の前に現れたといった方が分かりやすい。

早い話村全体が中世なのだ。そのなかで目立たないようにひっそりと画材屋や額縁屋、それにパン屋や花屋などが遠慮しながら営まれている。

実は私の本当の目的は、パリの画商メーグ姉妹が設立した「メーグ財団美術館」の拝観で、館内にはボナール、ブラック、カレンデンスキー、シャガールなどの秀作がそろっており、それも嫌な監視員など一人もいなく無造作に、かつ見事なレイアウトでおいである。ここは、カタロニアの建築家J・シ・セールがミロやシャガールをはじめとする芸術家と共同でデザインしたもので、ヨーロッパでもっとも洗練された近代美術館の一つである。テラス庭園にはアーブ、コールドー、ミロ、ヘアワースらの彫刻やモビール、モザイクなどが松林の中に

ボンボンと置かれており、触らせてももらった。人生至福の時はそうざらにはないが、正に文字どおり満ち足りた一時でもあった。最近ビッグニュースとなったサザビーズオークションでの百億円のピカソの絵の落札以前の最高値段だった、あの有名なジャコメッティの「歩く人」もここにもある。さてと、もう一つの至福の時がそれに続いた話に触れてみることにする。

村外れに「コロンプ・ドール（金の鳩）」という満酒で有名なオーベルジュ（宿屋）を兼ねたレストランがある。広い糸杉の庭に純白の白鳩が飛び交っている。なんでもタクシーの運転手によるとミシュラン・ガイドでも紹介され幾つかの星ももらっているそうだ。「ミシュランってなんだ」と聞いた事を思いだすたびに赤面するが、四十年前とはそんな時代でもあったのだ。

前置きが長くなったが、ここでハーブの洗礼を受けることになったのである。生のハーブのマリネ約二十種類がテーブルにおかれていた。フェンネル、チコリ、アーティーチョーク、ホップ、レーキ、ルバーブ、チャイブなどなど。

生まれて初めて見るものばかりだ。拳大

のフェンネルの株にルバーブ・バターをつけたフレッシュな味にはたまらない。ああ俺はいまヨーロッパの逸品の只中にいるんだということをしみじみ感じたものだった。この有名なオーベルジュのテラスにはレジェの大壁画、プールのそばにはブラックの鳩、レストランにはピカソとマチスの絵があり、私はその前に座らせてもらったのだから至福も絶頂と相成った次第。

魚料理と鳥料理を注文した。実は「新制作派」に属した絵描きで当時パリに居住していた大叔父からこっそり教わった料理のカタカナメモをアンチョコにしていたから愉快にも簡単に通じてしまった。

私は独り旅だったので、相棒にタクシートの運転手を誘ったから彼も始終上機嫌。カタカナメモが分かる筈が無いので私を大の食通と見たらしい。ワインはあれが良いこれが良いと、高価なものをいいやがる。

ボーイを呼んで注文した中身を白状すると、魚はマスのオゼイユ(酸い葉)のソテー、鳥は白トリユフとタイム入りの丸焼きだった。ボーイはにっこりと「ウイ、セボン、ムッシュウ」。こちらもいい気分だ。マスの腹にはフェンネルの金魚藻のよう

な葉がたっぷり入り、鳥のほうはタイムとトリユフが絶妙にバターと絡み合っていて、魚も鳥も味を変えてしまっていた。魚は塩焼き、鳥は焼き鳥か腿焼きしか知らない無知の私にとっては、はじめての「ハーブの効用」を悟った次第であったのである。

フランス料理を確立したブリア・サヴァランのいう『美味礼讃』の中の味のハーブニーとはこういうことだったのかと初めて知らされた思いだった。

さて、最近日本でもハーブブームがやってきた趣がある。早春には園芸店や花屋にもハーブの苗木があふれている。実際どれ程の人が真剣に取り組んでいるかは疑問だが、テレビの料理番組にもやたらとハーブが登場しているの、ハーブ流行に灯を点けたのだろう。余計なことだが、ハーブの本格番組でここ一年以上続いているNHK番組の『猫のしっぽ、カエルの手』は実に秀逸である。

私のマンションのベランダには二十数種類のハーブを鉢と樽で栽培している。昨年の初夏に札幌の北端にある「滝野すずらん丘陵公園」を訪れた折、ハーブ・インストラクターと親しくなり、珍しい数種類がさ

らに加わった。

中でも大切にしているのがホップとルバーブである。いずれも多年草で無事越冬に成功し、今年もホップの蔓は二メートルを越え夏には花実がついた。ルバーブはジュースやジャムにするのを楽しみにしている。食卓にはハーブ茶を欠かしたことが無い。

中でもミント茶とローズヒップとハイビスカスに一つまみのラヴェンダー花を加えたハーブ茶を好んでいる。紅茶に生のペパーミント、ブラックミントを入れると紅茶ががらりと変わる。コーヒーをカルダモンの種入りの実四、五個つぶして煎じたお湯でいれると、コーヒーの味が一変する。ずーとしまつて置いたわたし自慢の流儀のつもりだったが、『猫のしっぽ、カエルの手』でも紹介され、ぼらされてしまった。興味があつたらぜひ会員諸賢もお試しあられよ。



自由執筆

## 隠れキリシタンの「魔鏡」

銅屋 次郎

隠れキリシタンが、幕吏に見つかからないように、集落の信仰の仲間と共に洞窟内で密かに信仰を守る。そのとき、祭器用具等は絶対に持ち込むことはできない。幕吏に踏み込まれても、証拠品は一切所持していないことが集会参加の鉄則である。

従って祈りの言葉（おらしよ）は天草や長崎方面で同じ地域にあっても集落が異なると、長い年月の口称伝承の結果、似ても似つかない言葉になっていたりしていた。これらのことは明治六年キリスト教解禁と共に分かった。

集団の宗教行事では、洞窟の中での蠟燭の灯りの中で信仰層に従った祈り（クリスマスやイースターなど）以外に、眼の前に信仰対象が必要であったと思う。しかし、形あるものを持ち込むことはできない。ここに十字架上のキリストの姿を映し出す「魔鏡」の存在意義がある。特に日本ではそれまでの宗教体験から偶像崇拜（信仰者

は決して後世に言う偶像とは思っていない）が必要であったと考えられる。

「魔鏡」はどこにあるのか、と言うと、大磯の「エリザベス・サンダース・ホーム」内の「澤田美喜記念館」内である。

澤田美喜女史は三菱財閥創始者岩崎弥太郎の長女として生まれ、外交官澤田廉三氏に嫁ぎ、外交官夫人として世界各国をまわり、夫君は国連大使まで務められた。戦後混血児の収容保護施設「エリザベス・サンダースホーム」を設立し多くの混血児を保護したことはあまりにも有名である。

「澤田美喜記念館」内には女史が集めた多くの隠れキリシタン遺品が展示され、端が磨り減った「踏み絵」などは、見る者にキリシタン迫害の強烈さを訴えている。

では「魔鏡」とはどんなものであったか。一見、どこにでもありそうな銅鏡でしかない。表面は鏡として使えるように良く磨かれ裏面は松・鶴・亀・梅などのお目出度い模様が浮き出るように施されている。ある程度の資産家であれば所有している、どこにでもある生活必需品としての「銅鏡」としか見えない。

ところが、その鏡に、ある程度以上の光

（暗闇では蠟燭の灯りで十分）を当てると、反射した先に「十字架上のキリスト」が、やや黄色みを帯びて浮かび上がると説明されている。

「実験をご覧になりますか」

との間に

「はい」

とお願ひして、太陽の光が差し込んでいる前庭に出た。そこで、太陽光の反射を受ける厚紙を用意し、そこに「魔鏡」の反射光を当てた。なんと、そこにはくっきりと、十字架上で苦しみのためか、やや顔を左に曲げたキリスト像が写った。

私は思わず感嘆の声を挙げた。

この魔鏡の構造は、レントゲンを当てて調査した結果、表面の鏡を薄く削りその下に、十字架と、写し出された映像よりもやや太めのキリスト像が嵌められていることが分かったが、製法は定かではない。

いずれにしても、隠れキリシタンの人々の「信仰を守る」意思の強さを感じた。

読者の中で、一見したいと思う方は、事務局の下山田さんまでお申し出下さい。先方の都合を聞いてご案内します。